

「自らの命を守るための知識・行動・意志を醸成する」

平成 25 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校 南国市立三和小学校

I 学校における背景、問題意識

(学校・地域における防災上の課題)

南国市立三和小学校は、太平洋沿岸部から約 1.2 km に位置し、校舎は南舎 1 階北舎 2 階建てで海拔 4.1 m という立地条件にある。地震発生の際には、30 cm の高さの津波が約 40 分で到達、最大浸水深が約 6 m と想定されており、大規模な被害が懸念されている。減災に向けて、校舎屋上への外付け避難階段が新設され、校区内に避難タワーや防災無線放送タワーの建設、備蓄倉庫の整備なども進められている。平成 26 年 7 月に「三和コミュニティセンター（学校から北へ約 900 m、徒歩で約 12 分）」が建設され、避難場所をこれまでの「琴平山（学校から走って約 12 分）」から変更する予定である。

(児童の現状)

災害について身近に感じていない児童が多く、地震について知っている児童は多いが、実際に地震が起きた時の行動、避難場所、家庭との連絡方法などについて決めている児童は少ない。

(家庭・地域の現状)

保護者や地域の方々の防災に関する意識や知識については温度差がある。各地区の自主防災組織は防災意識が高く、地域の避難訓練等が実施されているが、家庭からの参加が少ないことが課題である。

そこで、保護者、地域、関係機関と連携協力を図り、緊急地震速報システムの導入を視野に入れ、より迅速に、より安全確実に避難できる体制と条件整備の確立を目指して取り組むこととした。この取組を通して、児童には「自らの命を守るための、知識・行動・意志」を醸成し、将来の地域防災リーダーとなるための実践力をつけたいと考えた。また、学校、保護者、地域、関係機関が危機管理意識

を共有し、将来起きる南海大地震に備えた地域防災コミュニティを一層充実させたい。

II 取組のポイント

- ◆防災教育年間指導計画を作成し、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間等でねらいを明確にした意図的計画的な防災教育を展開する。
- ◆様々な場面や状況を想定した実践的な避難訓練を年間を通して実施し、児童の危機回避能力や判断力・実践力を身に付けさせる。
- ◆家庭や地域、関係機関と防災訓練や講習会を行い、連携を密にしつつ地域防災コミュニティを充実させる。

III 取組の概要

1 三和小の防災教育の目標

自らの命を守るための知識・行動・意志を醸成する ～自らの命を守るため、正しい判断ができる子どもを育てる～

2 三和小の防災教育の観点

- A：知識を身に付ける
- B：行動する
- C：意志を養う

本校では、防災対応力に応じて次の 5 つの防災教育の観点を設定し、学習内容のねらいを明確化するようにした。

- ① A 防災減災について知識を身に付ける。
- ② B 自らの判断で適切な行動がとれるようにする。
- ③ C 「学び」を将来につなげる意志を養う。
- ④ A B 家庭・地域とともに災害への備えを行う。
- ⑤ B C 他者と協力して防災に取り組む力を育てる。

3 取組内容

(1) 実践的な避難訓練等の実施

児童及び教職員の危機回避能力・判断力・実践力を養うため、下記のように様々な場面での避難を想定した訓練を年間通して実施した。いざという時に状況に応じて対応できるよう、複数の避難場所(屋上、琴平山、三和公民館、運動場等)への避難を経験するように計画した。

【第1回】引き渡し下校訓練(4月)

引き渡し想定：緊急連絡カード活用

【第2回】避難訓練(5月)

昼休み時：琴平山への避難(時間計測)

【第3回】避難訓練(6月)

水泳中：屋上への避難

【第4回】避難訓練(7月)

掃除中：屋上への避難(縦割り班で)

【第5回】避難訓練(9月)

運動会練習中：屋上への避難(上級生の指示のもとに)

【第6回】避難訓練(10月)

授業中：屋上への避難(告知なしで)

【第7回】避難訓練(11月)

授業中：屋上への避難(緊急地震速報音源活用)

【第8回】避難訓練(12月)

昼休み中：屋上への避難後、琴平山へ二次避難(緊急地震速報音源活用、児童及び教職員に告知なしで)

【第9回】避難訓練(1月)

始業前：屋上への避難

【第10回】避難訓練(2月)

火災想定：運動場へ避難後、屋上へ避難

【第11回】避難訓練(3月)

授業中：三和公民館への避難

(2) 防災学習

各学年の防災教育重点目標を設定し、教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間等でねらいを明確にした意図的計画的な防災教育を展開するようにした。

ここでは、2学年生活科の実践例を紹介する。防災の視点をあてた題材を用いながら、生活科の目標の達成をねらうことを重視した実践である。

【第2学年 生活科学習指導案より抜粋】

平成26年1月21日実施 児童数21名

1 単元名 「あしたへダッシュ」

2 単元について

本単元は生活科の最終単元で、これまでの自分自身を振り返る学習を通して、自分の成長を実感させることをねらいとしている。単元を年間の学習を通して気付いたことやできるようになったことをまとめる学習と、幼少期からの成長をまとめる学習の2つに分けて構成する。これらの学習を通して、自分の周囲には成長を支えてくれたたくさんの人がいること、これからも成長を応援してくれることなどに気付かせ、感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもち、意欲的に生活できるようにしたい。

本時では、防災についての学習をまとめ、保護者や地域の方に発表することを通して、自分の成長に気付かせることをねらいとしている。地区別の「防災マップ」や「防災倉庫」「避難の仕方」「地震や津波について」のグループに分かれ、ポスターセッション方式で発表する。発表の中には、学習を通して気付いたことや自分たちの思いの変容を入れさせる。保護者や地域の方からは、子どもたちの成長についての感想をいただけるように事前に手立てをうっておく。

3 防災に関する視点

これまで通学路探検やお店探検を通して、地域にある防災に関わるもの(避難場所、避難タワー、海拔の看板、津波誘導看板、防災倉庫等)、地震や津波が起こった時に危険になりうる箇所を探す活動をしてきた。地図にまとめていく中で「浜改田は学校や里改田より(土地が)高い」「避難タワーはいつできるの?」「津波はどれくらいの時間で来るの?」など気付きや新たな疑問も生まれ、その都度、保護者や地域の方へのインタビューをして調べてきた。防災について学習したことを「こんな勉強したよ」と保護者へ手紙を書く活動もしてきた。そこで防災についての学びを保護者に向けて発表する活動を通して、児童の成長を振り返り、見ていただく1つの機会としたい。

4 単元の目標

- ・成長を振り返ることにより、自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどがわかり、これまでの自分の生活や成長を支えてくれた人々への感謝の気持ちをもつことができるようにする。
- ・3年生での生活への期待や、これからの自分の成長への希望をもち、意欲的に生活しようとするようにする。

5 本時の指導





(1) 本時の目標

○防災での学びを発表することを通して、自分の思いの変化や成長に気付くことができる。

(2) 主な三和小の防災教育の観点

AB：家庭・地域とともに災害への備えを行う。

(3) 展開

	学習活動	指導上の留意点 (◆防災に関する留意点)	評価規準◎ (評価方法)
導 入	1. 学習の流れ、めあてをつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">成長はっぴょう会 ～ぼうさいへん～</div>	○これまでの学びの様子の写真などを掲示し、学習に意欲的に取り組めるような雰囲気づくりをする。	
	ぼうさいの学びを通して、成長した自分たちを見てもらおう！		
展 開	2. それぞれのグループに分かれて発表する。 ・防災マップ (里改田・浜改田・片山) ・防災倉庫 ・地震・津波について ・避難の仕方 	○ポスターセッション形式で発表する。1回約5分を目安に合図をし、参観者に各グループに回ってもらうようにする。 ◆防災の学習を通して気付いたことや考えたこと、考えの変容も発表させる。 ○質疑応答の時間を設定し、保護者や地域の方に質問や感想を言ってもらう。児童の成長を気付かせるような感想を言ってもらえるよう事前に手立てをしておく。 ○質問がない場合は、児童から発表についての逆質問をするように事前に用意しておく。	 
終 末	3. 保護者の代表の方から感想を聞く。  4. ワークシートにまとめを書き、発表する。	○子どもたちの成長を気付かせるような感想を言ってもらえるよう、事前をお願いしておく。 ◆保護者に防災について、さらに知りたいこと学んでほしいことも言ってもらう。 ○自分の成長に気付いている児童に発表させる。 ○ワークシートは持ち帰り、保護者に感想を書いてもらうようにする。	◎防災での学びを発表することを通して、自分の思いの変化や成長に気付いている。 【気づき】(ワークシート)

(3) 保護者・地域との連携

①防災キャンプの実施

これまで行われていたPTA子ども会部主催による「子ども会キャンプ」に防災関連の内容を入れることにより「防災キャンプ」としての位置付けを行った。

【1】ねらい

- 避難所生活を想定し、飯盒炊飯と非常食、テント設営を体験し防災意識を高める。
- 地域の大人とかかわり、ふれあうことで地域コミュニティを形成する。
- 着衣水泳を行うことで、あきらめず自らの命を守ることを学ぶ。

【2】期日

平成25年7月21日(土) 22日(日)

【3】場所

三和小運動場、体育館、中庭、プール

【4】参加 児童 約90名

【5】内容

(1日目)

- ・飯盒炊爨(運動場)
三和地区自主防災会に属する地域の方の指導で、飯盒炊爨を実施。ブロックを利用してのかまどづくり、米のとき方、火の起こし方などを習い、共に夕食をとった。
- ・テント設営(運動場)
保護者の指導でテント設営を行った。これまでは保護者主導の設営であったが、今回は児童自ら活動を行った。

(2日目)

- ・防災クイズ(体育館)
保護者の作成した問題を児童が解く。
- ・非常食体験(中庭)
地域の「食育改善グループ」のお世話で、「備蓄米」と「すいとん」を朝食時に食した。
- ・着衣水泳体験(プール)
南国消防署の指導により、着衣水泳を実施した。

【6】成果

飯盒炊爨、非常食体験ともに初めての児童が多く、興味と関心の中、取組が進められた。テント設営は児童主体

に行った。これにより有事の際のイメージを児童は持つことができ、地域の方とのコミュニケーションが図られた。



【テント設営】

【自主防災会と飯盒炊爨】

②三和小防災教育実践委員会の立ち上げ

地域自主防災会、公民館長、PTA代表、市危機管理課、消防団等の関係機関、保育所、中学校、教育委員会等21名を構成員とした「三和小防災教育実践委員会」を立ち上げ、年間3回の会を開いた。

三和小の防災教育を理解していただき、講演会や訓練など連携して取り組む機会を模索したり、いざという時の避難行動について意見交換したりする等、活発な協議を行うことができた。学校の取組のねらいや児童の頑張りを伝えたり、地域の防災に対する思いや願いを感じたりすることで、防災を共に考え、地域防災コミュニティを充実させていくきっかけになった。



【第1回三和小防災教育実践委員会の様子】

(4) 関係機関との連携

①南国市危機管理課からの助言

「南国市の防災対策について」南国市危機管理課 西原三登 課長を講師としてお招きし、校内研修を実施した。地震・津波を「正しく恐れる」ために、地震・津波の特性を正しく理解し、きちんと備えをすることが大切だと改めて感じた。



【市危機管理課長をお迎えしての校内研修】

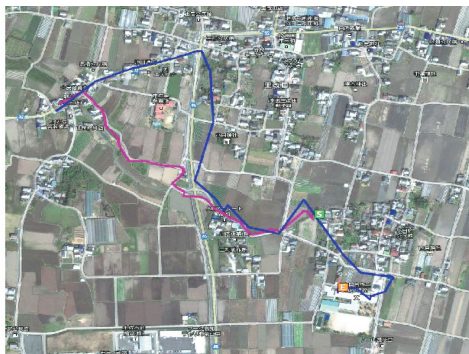
②高知工業高等専門学校からの指導助言

ア) 岡田准教授による指導

岡田将治 准教授には、年間を通じて本校の防災教育のアドバイザーとしてご指導、ご助言をいただいた。

○GPSによる通学路調べ

児童個々の通学路をGPSにより把握し、防災マップづくりやその他の学習に役立てる。さらに、登下校の有事における避難場所の経路を確認する。



【GPSによる通学路データ】

○校内研修

防災教育の進め方について、第1回アンケート結果と年間指導計画についての助言をいただく。

○防災学習会 11月24日

「これからの防災教育の進め方」について講和をいただく。

イ) 出前授業

本年度は、高知高専による出前授業を3回実施した。出前授業では、地震や津波のメカニズムの説明や、模型を使った実験など、児童の興味関心を高め、地震や津波に対する科学的な認識を育てるきっかけとなった。

対象学年	学 習 内 容
3・4年	6/27「地震・津波からいのちをまもるには？」
5年	10/29「津波について考える」
6年	6/14「東日本大震災をもとに南海トラフ巨大地震への備えについて学ぼう」

③宮城県岩沼市との交流

ア) 防災講演会 7月3日

(会場：南国市スポーツセンター)

教育、防災関係者をはじめ、PTA、地域住民など約120名の参加による防災講演会を実施した。東日本大震災で被災した宮城県岩沼市玉浦中学校の横橋健校長先生をお招きし、「玉浦中学校の防災教育」と題してご講演いただいた。有事の際に自分の命を守るための防災教育、また、学校だけでなく家庭や地域との連携についてもお話しいただき、大変参考になった。

イ) 地域ぐるみ防災学習（防災参観日）

11月24日

○交流事業報告会

「姉妹都市提携40周年記念 南国市姉妹都市親善協会 南国市・岩沼市中学校交流事業」により、被災地を訪問した6年生2名が、全校児童、保護者、地域の方々にその報告を行った。



○講演

高知高専 岡田准教授の講演からは、学校における防災学習の大切さだけでなく、家庭や地域との連携を行い、地域ぐるみで防災に取り組んでいくことの大切さを改めて強く感じた。

また、宮城県岩沼市立玉浦小学校の柴田防災主幹教諭からは、震災の様子や学校再開から現在に至るまでの取組などを詳しくお話しいただいた。



○防災関連グッズや取組の展示

保護者や地域の方々の防災意識を高めるために、本や資料、交流事業での活動の様子や防災アンケートの結果などの展示を行った。また、業者による防災グッズの展示コーナーでは、家庭でできる防災対策についての相談も行われ、防災への意識の向上につながった。



IV 成果と今後の取組

1 成果

- 避難訓練は様々な条件や場面を想定し、昨年度と違った緊張感を持って行うことができた。学習と訓練を通して、児童の防災意識や知識、行動力が高まった。
- 様々な外部講師を招聘しての学習は、児童をはじめ、教職員、保護者、地域の防災教育についての理解を一層進めた。
- 岩沼市からの講師のお話から「東日本大震災」の状況や具体的な取組を学ぶことができ、防災教育の認識を高めることと

なった。

- 個々の授業では学習後のまとめが次の学習に活かされ、学習につながりをもたせることができた。
- 地域との連携で様々な取組を行った結果、学校が更に開かれ、地域コミュニティが進んだ。

【児童のアンケート 5月－12月の比較】

「家において地震が起きた時、避難する安全な場所を知っているか」という問いについては「知っている」が79%から95%へ増加。「避難した後家族と集合する場所を決めているか」については「決めている」が21%から53%に増加した。

【保護者のアンケート 5月－12月の比較】

「あなたの地区で地震、津波の避難訓練を実施したことがありますか」に対して「ある」が71%から91%に増加。「あなたの地区の避難訓練に参加したことがありますか」は「ある」が46%から71%へ増加した。

2 今後の課題

- 次年度に向けて、十分に時間を確保し、低学年から6年間の系統的横断的防災教育プログラムをより綿密に立てる必要がある。また、防災学習は、学習のマンネリ化をしない手立てと工夫が大事である。
- 防災アンケートからわかるとおり、保護者の地区の避難訓練への参加率は71%と数値としては低い。家庭における防災意識の向上を図る更なる取組が必要である。
- 保護者の防災意識の温度差が顕著である。啓発活動を更に活発に行い、共に歩む防災への取組が大切である。
- 地域の人材活用の点が不十分である。人材をどのようにリストアップするかが課題であり、人材バンクを設立する必要がある。
- 児童の主体的な判断力を養う避難訓練を今後も重視していく必要がある。
- 「登下校時」の避難訓練、災害用伝言ダイヤルの活用などの実施、在宅時や外出時の地震発生に備えた訓練が必要である。